琉球大学学術リポジトリ

久高島の高齢者福祉の現状とスピリチュアルペインおよび制度としてのスピリチュアルケア

メタデータ	言語:
	出版者: 琉球大学法文学部
	公開日: 2016-08-15
	キーワード (Ja): 高齢者福祉, 久高島, スピリチュアルペイン, 制度及び事業としてのスピリチュアルケア, 信仰の尊重
	キーワード (En):
	作成者: 浜崎, 盛康, 川元, 恵美子, Hamasaki, Moriyasu, Kawamoto, Emiko
	メールアドレス:
	所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/34885

p.9　18 行目

誤　　IV.考察ースピリチュアルペイン、制度としてのスピリチュアルケア、固有の信仰の尊重?

正　　IV.考察ースピリチュアルペイン、制度としてのスピリチュアルケア、固有の信仰の尊重

久高島の高齢者福祉の現状とスピリチュアルペインおよび制度としてのスピリチュアルケア

A present state of social welfare, spiritual pain and spiritual care system in Kudaka island

浜崎　盛康・川元　恵美子

Moriyasu Hamasaki・Emiko Kawamoto

沖縄県南城市の久高島はイザイホーに代表される神の島として知られるが、高齢化がすすんでおり、55歳以上の高齢者が島の人口に占める割合は40%にもなる。しかし、島には入所型の介護施設がないため、高齢で要介護状態になると島を離れ島外の老人ホーム等に入所し、そこで亡くなり死後に島に戻るという現実がある。このことは島では、「連れて行かれる」と表現する事態であり、スピリチュアルペインを生じさせるものである。本稿は、久高島の調査に基づいて島におけるそのようなスピリチュアルペインを確認し、これに対する島の取り組みが福祉制度におけるスピリチュアルケアとして捉えられることを示し、さらに、その際固有の信仰を尊重することも必要であるということを論じるものである。

キーワード：高齢者福祉、久高島、スピリチュアルペイン、制度及び事業としてのスピリチュアルケア、信仰の尊重

はじめに

スピリチュアルケアやスピリチュアリティについては、いろいろな方面からの研究書や一般向けの書籍を多く目にするようになってきた。その中で医療分野、特にホスピス・緩和ケアの領域においては、しっかりした学問的研究がなされてきている。本研究はホスピス・緩和ケアにおけるスピリチュアルペインとスピリチュアルケアの視点から、高齢者福祉におけるスピリチュアルケアの必要性について論じる。そのために、具体的な事例として、沖縄県南城市の離

島である久高島の高齢者の場合を採り上げ、アンケート調査等を通して久高島の高齢者の間に見られるスピリチュアルペインを明らかにし、いわば制度及び事業としてのスピリチュアルケアについて論じ、さらに、福祉においても固有の信仰や祈りを尊重することの必要性について論じたい。

Ⅰ.スピリチュアルケアとは

「スピリチュアルケアとは何か」いろいろ議論があるところであるが、「スピリチュアルペインから見たスピリチュアルケア[1]」において論じたように、スピリチュアルペイン(spiritual pain)を基に考えると、スピリチュアルケア（spiritual care）とは、「生きる力を取り戻すケア」であり、もう少し具体的には、「生きる意味を取り戻すことを援助するケア」であり、「生きることを援助するケア」であると言える。まず初めに、この点に関する我々の論の要点を簡単に確認しておきたい。

スピリチュアルペインについては比較的多くの研究者が基本的に一致しており、多少の文言や表現の違いはあれ、スピリチュアルペインとは「生と死、その意味に関する痛み」であるというように捉えている[2]。このように捉えることが出来るスピリチュアルペインから、我々は「スピリチュアル」とは何か導き出した。「スピリチュアルペイン」から「ペイン」を取り除けば「スピリチュアル」が残る。このいわば形式的な操作を「生と死、その意味に関する痛み」にも適用してみると、「痛み」を取り除けば、「生と死、その意味に関する」が残る。したがって、この「生と死、その意味に関する」が、スピリチュアルペインを基に考えたときの「スピリチュアル」の意味である[3]。さらに、スピリチュアルケアは、「スピリチュアル」に「ケア」が付け加わったものであるから、「スピリチュアルケア」とは、「生と死、その意味に関するケア」であるとひとまず

1 浜崎盛康「スピリチュアルペインから見たスピリチュアルケア」、「人間科学第27号」琉球大学人間科学科紀要、2012年3月、pp.261～275。
2 同上、pp.261~263参照。なお、同論文では、死の恐怖そのものもスピリチュアルペインを引き起こすことがあるということを論じたが、本稿ではこの点については触れない。
3「スピリチュアル」をこの様に捉えることは、スピリチュアルペインだけではなく、スピリチュアル・ジョイ（spiritual joy）についても、「自己の生と死、その意味に関する喜び」として語れることになり、大きなメリットがある。スピリチュアルケアも、スピリチュアル・ジョイとの関連でも語れるのである。しかし、ここではスピリチュアルペインが問題であるので、「ジョイ」の方は置いておきたい。

言えることになる。しかし、ここでは、スピリチュアルペインが問題であるから、その意味で、スピリチュアルケアとは、「生と死、その意味に関する（由来する）痛み(ペイン)についてのケア」であるとすることができる。

この様なスピリチュアルペインとスピリチュアルケアは、これまで主にホスピス・緩和ケア等の医療に関連して議論されてきた。しかし、スピリチュアルペインは末期の患者だけが持つのではなく、例えば自殺者も持ち[4]、以下に見るように、小規模の離島の高齢者も持っている。すなわち、高齢者福祉においても、スピリチュアルペインが問題になるケースがあり、したがって、そのようなケースではスピリチュアルケアが必要となる。

Ⅱ.久高島における福祉の現状とスピリチュアルペイン

1．久高島における福祉の現状[5]

沖縄県は「離島・過疎地域支援事業」を 2000 年（平成 12 年）から 5 年間実施した。これは県内の 3 離島、久高島、渡嘉敷島、波照間島をモデル指定し、高齢者の「介護予防」や「生活支援」の整備を図るものであった。この事業の一環として、久高島に 2002 年に「有見会」というワーキンググループが設置された。そして 2003 年(平成 15 年)には、有見会の活動として「ふばの里」がスタートした。「ふばの里」は県の事業の終了後も「ボランティアグループふばの里」としてその活動を継続させ、現在では、集落の中心部にある久高島離島振興総合センターで、ミニ・デイサービスが原則として第一、第三土曜日の午後 1 時 30 分～3 時 30 分の時間帯に実施されている。

久高島の介護保険実施状況を見てみると、公益社団法人地域医療振興会の調査によれば、2012 年（平成 24 年 7 月末現在）では、第 1 号被保険者数が 97 名、第 2 号被保険者数 80 名の合計 177 名、要介護認定者数は 65 歳以上が 26 名である。介護保険の施設サービス受給者数は介護老人保健施設が 7 名である。介

4 最近のものとしては、たとえば、窪寺俊之「スピリチュアリティと自殺念慮者へのケア」、『スピリチュアルコミュニケーション』、窪寺俊之編著、聖学院大学出版会、2013 年 3 月 21 日、pp.155～183。

5 久高島の概況と福祉の現状については、詳しくは、川元恵美子の学位論文「エンド・オブ・ライフケアと沖縄の伝統的な信仰－福祉が抱える現状とその課題－」pp.88～99、参照（http://ir.lib.u-ryukyu.ac.jp/handle/123456789/29435）。

護保険の居宅サービス受給者数は訪問介護が1名、通所リハビリが1名、通所介護が4名、居宅療養管理指導が2名、福祉用具貸与が6名、居宅介護支援が5名である。久高島には入所型の介護施設がなく、介護保険のサービスは訪問介護と島外の通所リハビリなどを利用しており、要介護状態になれば必然的に島外に移らざるを得ない。

2. 久高島の高齢者のスピリチュアルペイン

そのように、要介護状態になると島を離れ、沖縄本島の介護施設に入所することも少なくない訳であるが、このことは一方ではもちろん島で受けられなかった介護を受けられるようになるということである。しかし、他方では、大きなスピリチュアルペインを引き起こすものでもある。というのは、島を離れた高齢者が次に島に戻ってこられるのは、多くの場合島外で亡くなった後でしかないからである。このことを、次に見るように「久高島振興会」のホームページ[6]では、「毎年数名のおじーやおばーが本島に連れて行かれ数名が亡くなって島に戻ります。」と記している。

「久高島振興会」は、そのホームページによれば、平成13年に任意団体として活動を始め、平成21年に法人格を取得し、「「久高島の文化や祭祀、信仰をいつまでも伝えてゆく事が出来る島作り」、「訪れた人が癒されるような島作り」、「雇用促進と島の自立を目指して宿泊交流館、レストランとくじん、船待合所運営と、体験滞在型観光、地域産物の買取・加工販売」等の事業」を行っている。そして、「生涯暮らし続けられる久高島を目指して」というタイトルの下、以下のように述べている。少々長くなるが、全部引用してみたい。

「久高島には介護施設がありません。介護が必要になると住み慣れた島から離れなくてはなりません。毎年数名のおじーやおばーが本島に連れてゆかれ、数名が亡くなって島に戻ります。皆心を痛めなんとかしないといけないと感じています。しかし、その想い、先祖や高齢者を大切にする「久高島の心」をかたちにする為には、介護保険制度や若者不在による人手不足、住居不足などこの規模の離島、特に久高島ならではの立ち向かうべき課題が多々あります。平

6 http://www.kudakajima.jp

成２１年、私達は法人格を取得し、一つの課題をクリアしました。そして、皆様のおかげもあり着々と運営を軌道にのせ、体験滞在型観光の推進の可能性など新たな雇用も生み出しつつあります。家族が島にいればおじーやおばーも島にいることができます。若者がいれば介護施設の運営に必要な人員も確保できます。宿泊施設や食堂を頑張ってお客様に島の魅力を提供し、より多くの利益を生み出せるようになれば介護施設の運営に利益をまわしてゆくことが出来ます。介護保険に頼らない島の規模での介護施設運営の可能性も含め、一歩一歩前に前進しながら可能性を模索しています。」

あらためて確認すると、お年寄り達が島を離れ島外の病院への入院や老人ホームに入所することは、「連れていかれる」と表現されるようなことなのであり、「亡くなって島に戻」るという現実があるのである。

実際、島で最後まで暮らしたいということが、久高島のお年寄りの望みであり、川元の調査でこの点について次のような声が聞かれた[7]。この調査における「島に対する愛着度、満足度」に関する質問に対して、「この島がいいよ～、ここで過ごしたい」、「あの世に往くまで、久高島で」、「この島が一番上等」、「こっちがいいですよ、ここに決めている」等の回答があり、「終の棲家」に関する質問に対しては、「久高島で最後まで暮らしたい」、「100 歳まで生きて、久高で終わりたい」、「島で暮らしたいです」という回答や、「ここでゆっくり暮らします」、「ウガンをして、120 歳まで生きます」、「イザイホーのカミ様にお祈りして暮らします」という回答があった。

そのように「島に対する愛着度、満足度」が高く、最期まで島で暮らしたいという気持ちが強い分、介護が必要になって島から「連れて行かれ」、「亡くなって島に戻」るという現実はスピリチュアルペインを引き起こすのである。上

7 川元恵美子「久高島における伝統的信仰と高齢者福祉をめぐる現状－エンド・オブ・ライフケアとスピリチュアルケアの視点から－」、「地域研究」、第 12 号、沖縄大学地域研究所、2013 年 9 月、pp.34～37 参照。
もちろん、「島で最後まで暮らしたい」という願いは、久高島のお年寄りに限られるものではない。たとえば、津堅島でも「地域で暮らし続けたいと願う島民が多」い（「住民支え合い活動レポート集」（平成 19 年 3 月）沖縄県社会福祉協議会 pp.54～56）。また、波照間島の場合は「島で最後まで暮らしたい」という願い」は当然あるものの、葬送儀礼（洗骨改葬）との関係で、この点に関しては少々複雑であるようである（永井彰「沖縄の島嶼部における地域ケア・システム構築の現状と課題」、東北研究室紀要、51、2010、p.7）。

で述べたように、スピリチュアルペインとは「自己の生と死、その意味に関する痛み」である。住み慣れた島を離れて、島外の施設で要介護の身で人生の最期を生きて死を迎え、そして死んで島に戻るということに何の意味があるのか、というスピリチュアルペインがそこにはある。

Ⅲ.久高島無の高齢者へのアンケート調査

久高島における以上の様な高齢者のスピリチュアルペインとそれに対する島の取り組みを福祉の観点から捉え直すために、川元が久高島の高齢者にアンケート調査を行った。それによって、高齢者福祉におけるスピリチュアルケアの必要性について論じたい。

1．調査の日時と方法

2013年9月23日から10月にかけて、久高島で暮す在宅の高齢者の方々に質問紙を用いたアンケート調査を行った。面接時間は一人に約90分から120分間である。

2．調査対象者の属性

対象は沖縄県、南城市知念久高島に暮らす60歳以上の高齢者17名である。調査対象者の内、回答者は調査協力の同意が得られた方で、性別に関しては男性が8人、女性が9人であり、年齢は60歳代が8名、（男性5名、女性3名）、70歳代が2名（何れも女性）、80歳代が6名、（男性3名、女性3名）90代が1名（女性）である。出身地は全員が久高島である。回答者は高齢である為、14人は筆者が面接しアンケート用紙に記入した。その内3人は本人による自記で行った。

3．倫理的配慮

事前に自己紹介すると共に、研究の目的を参加者及び家族の責任者の前に於いて口頭で説明し承諾を得た。

4．面接場所

島の紹介者の方と共に個人の御自宅を訪問することを基本としたが、可能な方々は、お願いした時間に其々が民宿のテラスに集まってもらった。比較的若い回答者の方々は、島の食事処で御茶を飲みながら、自記式のアンケート調査用紙に記入をお願いし協力頂いた。

5．面接調査の内容

本「Ⅲ」節では面接調査の内容から、本稿のテーマと特に関連が深い「1. 本人と家族について」、「2. 島を離れて本島の老人ホームへ行くことについて」について調査結果を示し、「Ⅳ」節で高齢者福祉におけるスピリチュアルケアの観点から考察を行いたい。

〈調査結果〉

1. 本人と家族について

(1) 生まれたところについて

「生まれたところは久高島ですか。」という質問に、17 名全員が久高島であると答えた。

(2) 結婚について

「ご主人（奥さま）はお元気ですか」と言う質問に、「はい」と答えた人が 15 名、「結婚していない」と答えた人が 2 名であった。

(3) 子どもについて

「子どもは何人ですか」という質問に対して、5 人と答えた人が 5 人、4 人と答えた人が 5 人であり、3 人と答えた人が 1 人、2 人と答えた人が 4 人、1 人もいないと答えた人が 2 人であった。

(4) 家のお墓について

「家のお墓について」と言う質問に対して、家族だけの墓が 8 名、門中墓が 6 名　兄弟墓が 0 名、その他が 2 名、無回答が 1 名であった。

(5) あなたの家について

「あなたの家について」と言う質問に対して、ムートゥヤーが 6 名、ナカムートゥが 0 名、ヤータッチャーが 10 名、無回答が 1 名であった。

以上のように、本調査では回答者全員が久高島生まれである。子どもは 4 人～5 人が 1 番多く、お墓は家族墓や門中墓が中心であった。家はヤータッチャーが 10 人で、ムートゥヤーが 6 人であった。

2．島を離れて本島の老人ホームへ行くことについて

久高島で暮す高齢者17名のお一人おひとりに島を離れて本島の老人ホームへ行くことについて尋ねた。回答は以下の通りである。

(1)　「島には介護施設がないので介護が必要になったら、沖縄本島の老人ホームに行ったりしますが、貴女は沖縄本島の老人ホームに行くことをどう思いますか」という質問に対して、「行きたくない」が5名、「老人ホームが良いです、ホームに行きます」が2名、「久高島が終の棲家です」、「島で最後まで暮らしたい」、「その時の必要に応じてなら仕方がない」、「出来れば久高島に老人ホームを作ってほしい」、「子どもが介護してくれると思うので行かない」、「出来る限り在宅で見てあげたい」がそれぞれ1名、「考えていない」が2名、無回答が1名であった。

(2)　「あなた自身は、島を離れて老人ホームに行きますか」という質問に対して、「行かないつもり」が5名、「仕方がないから行く」が2名、「いいえ、自宅で過ごす」、「島で最後まで暮らす」、「なるべくは行きたくない」、「老人ホームも良いと思う」、「家族が皆で看ると言われているので行くことはない」、「その時になってみないと判らない」がそれぞれ1名、無回答が4名であった。

(3)　「なぜ、島を離れなくてはなりませんか」という質問に対して、「介護する人がいない場合は仕方がない」が2名、「介護する者とホームがない為」が2名、「若者が島にいないので看取る人がいない」が2名、「子ども達が1人も看なければホームか病院に行くしかない」、「子どもたちが島にいないので介護者がいない」、「施設がないから」、「特に考えはない」がそれぞれ1名、無回答が7名であった。

(4)　「できれば最後まで島にいたいですか（島で死を迎えたいですか）」という質問に対して、「「はい」が10名、「いいえ」が2名、無回答が5名であった。

(5)　「死後（魂／マブイ、マブヤーなど）はどうなると思いますか」という質問に対して、「お墓に帰る」が5名、「生き続ける」が2名、「ニライカナイ」が3名、「仏壇に入る」が1名、「島に帰る」が1名、無回答が5名であった。

(6)　「もし老人ホームに入ったら、拝みは老人ホーム（施設内）でも、出来るだけ続けたいですか」という質問に対して、「毎日、拝みます」が3名、「ホームには入らないから」が2名、「拝みは必要に応じてやると思う」、「もし入るこ

とになった時は、拝みたい気持ちがあっても多分出来ないと思う」、「心の問題として拝みはすると思います」、「もしホームに入ったとしたら、主人のことと孫のことなどを祈る」、「考えたこともないです、行かないから」、「自分は早くボケた方が良いのかも知れないと思う」、「久高に向かって拝みをするが、ホームの中では止められるだろう」、「入所はしても拝まない」、「心の中で一人拝む」それぞれ1名、無回答が3名であった。

以上の様に、沖縄本島の老人ホームにいくことについて、「行きたくない」が5名、「久高島が終の棲家」、「家族が皆で看ると言うから行かない」、「自宅で過ごす」など、「出来れば最後まで久高島に居たい」、「終の棲家である」という方が大多数を占めていた。しかし、中には「仕方がないから行く」、「その時の必要に応じて仕方がないなら行く」という回答、あるいは「久高島に老人ホームを作って欲しい」などの回答もあった。更に「老人ホームが良いです、ホームに行きます」と言う特徴的な回答が2名の方から聞かれた。しかし、多くの方が望む「最後まで久高島で」を許さない島の現状がある。それは「若者が島にいないので看取る人がいない」、「介護する者がいない」と「老人ホームが島にない為」等の過疎や施設不足を挙げる声が多く聞かれた。また老人ホームに入所しても拝みは続けたいなど、自身の信仰は貫きたいという想いのある方々が殆どである。

Ⅳ.考察－スピリチュアルペイン、制度としてのスピリチュアルケア、固有の信仰の尊重?

以上のアンケート調査の結果と島の取り組みに関して、まず、介護が必要になって島を離れて施設等に入り、亡くなって島に帰るというスピリチュアルペインがあるということを再確認し、そして、そのスピリチュアルペインに対する島の取り組みを制度及び事業としてのスピリチュアルケアとして捉え直し、さらに今後の取り組みの方向性について考えてみたい。そして、その方向性の中に、固有の信仰の尊重が盛り込まれる必要があるということを示したい。

1．久高島の高齢者のスピリチュアルペイン

久高島の高齢者のスピリチュアルペインについては、「Ⅱ　久高島における

福祉の現状とスピリチュアルペイン」において既に論じた。ここでは、その要点を確認しておきたい。

久高島の高齢者は要介護状態になると島を離れ、沖縄本島の介護施設に入所することも少なくない。このことは、大きなスピリチュアルペインを引き起こすものでもある。というのは、島を離れた高齢者が次に島に戻ってこられるのは、多くの場合島外で亡くなった後でしかないからである。「久高島振興会」のホームページ[8]では、このことについて、「久高島には介護施設がありません。介護が必要になると住み慣れた島から離れなくてはなりません。毎年数名のおじーやおばーが本島に連れてゆかれ、数名が亡くなって島に戻ります。皆心を痛めなんとかしないといけないと感じています。」と記している。これがまさに、自宅で死ぬ事がままならないお年寄達が直面している厳しい現実であり、島から「連れて行かれ」、「亡くなって島に戻」ることによる、非常に重い意味を持ったスピリチュアルペインである。「1　スピリチュアルケアとは」で述べたように、スピリチュアルペインとは「自己の生と死、その意味に関する（由来する）痛み」である。要介護の状態になり、住み慣れた島を離れて島外の施設に入所し、そこで生きて死を迎え、そして死んで島に戻る、ということに何の意味があるのか、というスピリチュアルペインが久高島の高齢者の内にはあるのである。

2. 島の取り組みと制度及び事業としてのスピリチュアルケア

久高島は、島における「終の棲家」のあり方について、これからの「超高齢社会」及び「多死社会」に向けて、日本中が迎える現実的な問題を先行するような超高齢化の「先進」地域である。サービス基盤の遅れた久高島で多くの高齢者が暮らしており、既に見たように一生涯「島で暮らし続けたい」という高齢者のニーズがある。しかし、実際には自宅で最期を迎えられる人は限られており、住み慣れた「島では死ねない」という現実が横たわっている。高齢化率が40%にもなる久高島では[9]、年に数名のお年寄は島での生活を諦め島外の老人ホームに入所したり、病院に入院し、そのまま最期を迎えてしまう。繰り返せば、久高島のお年寄には、暮らしなれた島で死を迎えることも叶わず、死ん

8 http://www.kudakajima.jp
9「住民支え合いレポート集」、沖縄社会福祉協議会、平成19年3月。

でから本島で火葬されて「遺骨（遺灰）」となって島に帰ってくるという現実があり、このことがスピリチュアルペインを引き起こしている。

では、久高島においては、そのようなスピリチュアルペインに対して、どのような取り組みがなされているのだろうか。この点については、「Ⅱ　久高島における福祉の現状とスピリチュアルペイン」で見た。ここでは、その要点を簡単に確認したい。

高齢者の「介護予防」や「生活支援」の整備を図るものとして、沖縄県は「離島・過疎地域支援事業」を 2000 年(平成 12 年)から 5 年間実施した。これをきっかけとして、2002 年に「有見会」というワーキンググループが久高島に設置され、その活動として「ふばの里」がスタートした。「ふばの里」は「ボランティアグループふばの里」としてその活動を継続させ、現在では、集落の中心部にある久高島離島振興総合センターで、ミニデイサービスが原則として第一、第三土曜日の午後 1 時 30 分～3 時 30 分の時間帯に実施されている。「ふばの里」には、入ってすぐ正面の掲示板に、「年をとって介護が必要になっても、生涯暮らし続けられる久高島をめざして」と書かれた手作りの用紙が貼られている。

さらに、「久高島振興会」はより包括的に、「久高島の文化や祭祀、信仰をいつまでも伝えてゆく事が出来る島作り」、「訪れた人が癒されるような島作り」、「雇用促進と島の自立を目指して宿泊交流館、レストランとくじん、船待合所運営と、体験滞在型観光、地域産物の買取・加工販売」等の事業」を行っている。そして、既に見たように、「生涯暮らし続けられる久高島を目指して」、「介護保険に頼らない島の規模での介護施設運営の可能性も含め、一歩一歩前に前進しながら可能性を模索しています。」

これらの取り組みは、沖縄本島の老人ホームに「連れて行かれ」、「亡くなって島に戻る」というスピリチュアルペインを解消しようという意味を持つものである。したがって、これらの取り組みは、島で最後まで暮らしたいという久高島のお年寄りの望みを叶えたいというスピリチュアルケアとしてみることができる。

ところで、スピリチュアルケアは、「Ⅰ　スピリチュアルケアとは」で述べたように、「生と死、その意味に関する（由来する）痛み(ペイン)についてのケア」であるとすることができるが、そのケアは一般的に個人レヴェルで語られ、実践されることが多いと言えよう。しかし、ふばの里や久高島振興会の「生涯暮

らし続けられる久高島を目指して」という取り組みは、高齢者の「生と死、その意味」に関わるものとしてスピリチュアルケアであるが、それはいわば「制度」及び「事業」としてのスピリチュアルケアとして捉えることができる（もちろん、その実践においては個人対個人の面を持つ）。つまり、ふばの里の取り組みは「ミニ・デイサービス」として一つの福祉「制度」との関係における取り組みであり、久高島振興会の「生涯暮らし続けられる久高島を目指して」という取り組みは、「雇用促進と島の自立を目指して宿泊交流館、レストランとくじん、船待合所運営と、体験滞在型観光、地域産物の買取・加工販売」等の「事業」としての取り組みである。久高島の高齢者のスピリチュアルペインを、このような制度及び事業としてのスピリチュアルケアの実践によって緩和しようという試みが行われていると捉えることができるのである。

久高島における以上のような取り組みは、「地域ケア・システム」の構築の試みとしてのものであるが、ここで、さらにこれをスピリチュアルケア・システム構築の試みとして捉え直してみたい。

まず、地域ケアシステムという点についてであるが、永井は地域ケア・システムの構築という観点から、久高島を事例として取り上げ、次の様に述べている[10]。一般的に島嶼部では様々な制約条件のもとで、「介護状態の高齢者ケア」の問題を模索して行かなければならず、「人口規模が数百人程度の島では、入所型の老人介護施設を整備することがきわめて困難である。」(p.1) 沖縄県はこのような状況に対して、既に記したように、久高島も対象として含む「離島・過疎地域支援事業」を2000年（平成12年）から5年間実施した。この事業においては、「行政の政策として意図的に地域ケア・システムの構築がこころみられ」(p.2)、しかもその結果として高齢者介護を目的とする住民組織が島内に結成され、現在でも活動が続いている。その目指すところは、「介護が必要になっても島で住み続けることのできる体制作り……だが、現状においては、住民組織による生きがいデイサービスの実施という段階にとどまっており、比較的元気な高齢者の生活支援という意味では成果をあげているが、要介護高齢者の生

10 永井彰、前掲論文（2010）。地域ケア・システムとは、「一定の地域的範域の中で、行政機関、医療機関、福祉施設、住民グループなどが連携しつつ、高齢者本人やその家族にとって必要なサービスを提供する社会的ネットワーク」(p.1)

活を島の中のさまざまなアクターの連携によって支援する仕組みを構築するまでにはいたっていない。」（p.11）

永井の述べている久高島のこのような現状は、我々も調査を通して確認したところであり、依然として要介護状態になった高齢者の多くが住み慣れた島内の自宅を離れなければならない現状が続いている。たとえ介護保険の保険料を納めていたとしても「要介護」と認定された後、島内で介護サービスが十分に選択出来る状況にはない。介護療養型医療施設（療養病床）や介護老人福祉施設（特別養護老人ホーム）等の施設はおろか、訪問介護（ホームヘルプサービス）、通所介護（日帰り介護）のデイサービスや、短期入所生活介護（ショートステイ）等、様々な居宅（在宅）サービスの選択も十分と迄はいかない。以上のように離島の介護保険サービスに於ける“離島苦”とも言える現状は制度の理念には程遠く、「保険あってサービスなし」の状態が垣間見えてくる。

そのような状況を考えると、現実的には「地域ケアシステム」の構築は1つの重要な選択肢であり、「生涯暮らし続けられる久高島」の実現のための考慮すべき方策であるだろう。あらためて、久高島における取り組みが、地域ケアシステムの構築の試みであることを確認しておこう。2000年(平成12年)から5年間、沖縄県は「離島・過疎地域支援事業」を実施し、久高島も指定を受け、地域ケアシステムの構築が目指された。この事業の一環として有見会が結成され、有見会の活動としてふばの里がスタートした。久高島の島民は、有見会に参加し有見会からいろいろな情報を得、またふばの里にもボランティアとして参加した。ふばの里は、ミニデイサービスを提供し、島の高齢者がこれを利用している。ふばの里は、本土出身で久高島に居住する女性がボランティアで事務局業務を行った。南城市の社会福祉協議会も担当者が来て、リハビリ教室を行っている。しかし、もう一度永井の言葉を借りれば、「現状においては、住民組織による生きがいデイサービスの実施という段階にとどまっており、比較的元気な高齢者の生活支援という意味では成果をあげているが、要介護高齢者の生活を島の中のさまざまなアクターの連携によって支援する仕組みを構築するまでにはいたっていない。[11]」

11 永井、前掲論文、p.11。

この様に、島嶼部における地域ケアシステムの構築にしても容易ではないが、それにしても久高島の取り組みが示唆する重要な点が幾つかあり、永井は次のように述べている。「まず第一に、ワーキンググループという方式は、一定の有効性を持つものと考えられる。……第二に、行政からの支援や関与が不可欠である。……第三に、地域ケアの体制作りが何らかの形で島内での雇用に結びつくことが必要である。[12]」

ところで、久高島におけるこの地域ケアシステムの目指すところは、何であっただろうか。それは、確認すれば、「生涯暮らし続けられる久高島を目指して」ということである。すなわち、年をとって介護が必要になっても、島を離れずに済み、島にとどまって最期まで暮らし続けられるという晩年期の実現である[13]。そのケアは、島で生きて死を迎え、そのことに生きる意味を見出している久高島の人々に対する福祉システムとしてのケアである。このように、久高島における地域ケアシステムの目指すところは、「生と死、その意味に関するケア」として捉えることができるものであり、したがって、この地域ケアシステムは、スピリチュアルケアシステムとして捉えることができるのである。島で最期を迎える事を望んでいながら叶わないという現実に対する福祉制度としてのスピリチュアルケアは、スピリチュアルケアシステムとして捉えることが出来るものであり、これから成し遂げなければならない課題であろう[14]。

3．福祉制度と固有の信仰の尊重

ふばの里の取り組みや地域ケア・システムの構築の試みは、以上のように、福祉制度としてのスピリチュアルケアとしての試みとして、またスピリチュアルケアシステムの構築の試みとして捉えることができるが、そこには重要だが一般的にはあまり注目されていない点があるように思われる。それは、スピリチュアルケアの観点から、固有の信仰の尊重の必要性ということである。

---

12 永井、前掲論文、p.13

13 高齢者の晩年期のケアはエンドオブライフケア(end-of-life-care)と言われるが、詳しくは川元「エンド・オブ・ライフケアと沖縄の伝統的な信仰－福祉が抱える現状とその課題－」pp.71～79、参照

14 福祉におけるスピリチュアルケアの取り組みは、例えば、深谷美枝・柴田実、『福祉・介護におけるスピリチュアルケア』、中央法規、2008年参照。

久高島の高齢者のメンタルヘルスにとって、その信仰や祈り（御願(ウグヮン))が大きな役割を担っていると考えられる。久高島の高齢者10名に対する川元の調査がこのことを示唆しており、「祈り（拝み）」について尋ねたところ、以下のような回答があった[15]。

信仰(拝み、ウグヮン)がメンタルヘルスにとって重要という意味の回答として、「久高の信仰は心の健康になる」、「きっちりやっていたら安心」、「心が健康になる」、「気楽にゆっくりなる」、「ウガンは癒しになる」、「お願い事をしたら軽くなる」があった。また、直接メンタルヘルスに言及しているわけではないが、「一日いいことがあるようにと祖先に祈る」、「ウガンをするときには、120歳まで生きられるよう～」、「一日の健康を守って下さい」、「火の神にもお願いする」という回答もあり、久高島に特徴的な「イザイホーの神さまにお祈りする」もあった。逆に、「たまに忘れると不安になる」という回答もあった。

一般的に考えても、ある信仰を持っていれば、その信仰に基づく祈りは、祈る者のメンタルヘルスにとっていい影響を与える重要なものであろう。川元の2013年の調査では、上で既に見たように、老人ホームへ行っても、「毎日、拝みます」、「拝みは必要に応じてやると思う」、「心の問題として拝みはすると思います」、「もしホームに入ったとしたら、主人のことと孫のことなどを祈る」、「心の中で一人拝む」等の回答があった。しかし、老人ホームでは拝みはやりたくてもできないのではないかという、「久高に向かって拝みをするが、ホームの中では止められるだろう」、「もし入ることになった時は、拝みたい気持ちがあっても多分出来ないと思う」という回答もあった。

すなわち、久高島の高齢者にとって固有の信仰に基づく祈りは、そのスピリチュアルなメンタルヘルスにとって重要であり、老人ホームに入っても祈りは続けたいと思っており、しかし、老人ホームではその祈りができないのではないかとの懸念を抱えている高齢者もいるのである。

これらの調査結果から、福祉制度においても、固有の信仰に基づく祈りを尊重する必要性が浮かび上がってくるだろう。したがって、スピリチュアルケアシステムとしての地域ケア・システムにおいても、固有の信仰に基づく祈りが

15 川元恵美子、「エンド・オブ・ライフケアと沖縄の伝統的な信仰－福祉が抱える現状とその課題－」p.101。

実現できることが望ましいといえる。実際、久高島の高齢者の入所が多かった特別養護老人ホーム「しらゆりの園」（沖縄本島南城市知念）は久高島を望める位置にあり、川元の調査によれば[16]、しらゆりの園に入所した久高島のお年寄達は早朝から起床し、久高島を遥かに眺める事の出来る部屋から島の見える東方向に向かって祈りを欠かさなかったという。当施設では2001年（平成13年）頃が最も入所者が多く、一時期は6名もの久高島のお年寄りが入所しており、島が見えるように「久高の部屋」とも呼ばれる部屋があり、スピリチュアルな配慮もなされ、お年寄達が島の方言で話し朝夕の祈りを欠かさなかったということである。あまり多くはないと思われるが、固有の信仰（祈り、拝み）を尊重したこの様な例もあるのであり、今後福祉制度とその実践におけるスピリチュアルケアを考える上で重要なものであろう。

〔付記〕

本稿は、川元恵美子の学位論文「エンド・オブ・ライフケアと沖縄の伝統的な信仰－福祉が抱える現状とその課題－」の一部を基に、スピリチュアルペインやスピリチュアルケア等について大幅に加筆し、必要な修正を施したものである。

16 川元、同上、pp.116～118